

17代、400年にわたって 城下町をつないで発展させる

まつえ 松江大橋



松江は街を南北に分ける大橋川に橋を架けることで、水路で別れた末次と白潟を一体化させて城下町を発展させてきました。その中で最も古い橋が松江大橋です。

関ヶ原の戦い後、出雲、隠岐の大名として入封した堀尾吉晴父子は、城地を山間の広瀬富田城から水運の便もよく陸路も発達していた宍道湖・中海そばに移しました。しかし、大橋川にはそれまで人がやっと通れるだけの竹の橋（カラカラ橋）しかありませんでした。資材や諸物資を運び、城下町の建設を進めるには馬や荷車が通ることができる橋が必要です。そこで新たに架けられた橋が松江大橋です。

慶長13年(1608)、最初に架けられた木橋は、長さ154m、幅4mで大橋とよばれていました。寛永16年(1639)の洪水で斐伊川が宍道湖に注ぎこむようになると、大橋川も度々洪水に襲われ、その都度大橋も架け替えられてきました。

この大橋が松江大橋と命名されたのは明治7年(1874)

に架けられた ■位置図

14代からです。この後の15代で木製から鉄製となりましたが、白く塗られたトラス橋はそれまでの優美さが感じられ



ず評判は芳しくありませんでした。そのためか16代松江大橋は擬宝珠もつけられ、かつての橋のように優美さのあるデザインとなりました。

現在の橋は昭和12年(1937)に架けられた17代松江大橋で、橋の中央には展望のための張り出しが設けられ、御影石の欄干と唐銅擬宝珠、そして4つの灯籠が宍道湖とともに

水郷の町の風情を醸し出しています。

松江大橋の南詰めの「源助公園」には、架橋の際の犠牲者を供養する2つの石碑があります。

一人は初代松江大橋の建設時の源助です。大橋川付近は複雑な水の流れと軟弱な地盤などに妨げられ、容易に工事が進みません。そこで、川の神の怒りを静めるために、マチの無い袴（横縞の継ぎをした袴という説もある）をはいて、その日の朝一番に「カラカラ橋」を渡る男を人柱にしようとしたところ、たまたまその服装で橋を渡ったために捕らえられた足軽が人柱として生きたまま橋脚の下に埋められたのでした。

もう一人は、17代の架橋時、落下した鋼鉄製のバケットで頭を打って亡くなった「深田技師」（昭和の人柱ともいわれます）です。

現在、大橋川は洪水対策として、松江大橋付近の川幅拡張と護岸の嵩上げが計画されています。この計画が実現すると松江大橋は18代目の橋となります。



手前の松江大橋と重なるように架かる宍道湖大橋

明治23年(1890)、来松した小泉八雲が惹かれた松江大橋の「カラコロ」の響きは変ったが、今も水面に映る灯籠の明かりは知られざる面影を伝えてくる。



唐銅擬宝珠と御影石の欄干



源助柱記念碑(左)と深田技師記念碑(右)